

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370953

研究課題名(和文) マヤ系先住民女性の家事労働から捉える多文化主義社会における底辺労働力動員の再編

研究課題名(英文) A study of the reconstruction of poor labor force from the standpoint of domestic labor by the Mayan indigenous women

研究代表者

中田 英樹 (NAKATA, HIDEKI)

成蹊大学・その他部局等・研究員

研究者番号：70551935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀のグアテマラ現代社会においては、多文化主義と新自由主義のもとで、貧困層の労働力再編が進んでいる。本研究では、貧困層の先住民女性の視点を採用しつつ、彼女たちが、家政婦、あるいはホテルやレストランでのサービス業といった労働市場に統合される過程を分析した。複数の女性への聞き取りの結果、彼女たちは、自給的な家庭での生活と市場での賃労働を上手く組み合わせることによって、社会的・経済的な危機を乗り越えていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In the 21st century Guatemala, the reconstructing of labor force in the poor social class is accelerating, under Neo-liberalism and multiculturalism. In this study, by adopting a point of view of the Mayan indigenous female labor force in the poor social class, the process of integration into the housekeeper market or the service sector job in hoteles is analyzed.

As a result of the interview with various indigenous women, it is revealed that they are managing the economic or social crisis, by switching among assistant in domestic duties in her own family and labor by doing the same duties to get cash income.

研究分野：農村社会学、農業経済学

キーワード：先住民女性 家事労働 新自由主義 多文化主義 底辺労働力動員

1. 研究開始当初の背景

中米グアテマラには、総人口の六割とも七割ともいわれるマヤ系先住民が暮らしている。十九世紀末より近代資本主義国家建設へ向けた国民統合が推し進められるなか、二〇世紀前半では先住民たちは大規模プランテーションでの強制労働の、そして二十世紀後半の内戦（一九六〇から一九九六年）下では虐殺の対象とされてきた。

だが和平協定から二〇余年が経とうとしている今日、大統領選挙においても多民族・多文化主義が高々と唱えられ、先住民の側からも社会的尊厳や正義の回復を求めた運動が数多く展開されている。

しかしそれは、先住民にとっての平等な社会が、自動的に構築されていくことでは決していない。内戦の終結により、先住民だという理由で虐殺されることはなくなったが、途上国グアテマラという世界システムの周辺資本主義国家において、先住民たちはその最も周縁的存在として、一層厳しい経済的搾取の対象となっている。

ならば要請される考察とは、世界的経済危機に加えて新自由主義が一層熾烈化する世界的動向のなかで、突如として現れた多文化・多民族主義に呼応しつつ、グアテマラにおける周辺資本主義が、どのように新たな先住民搾取の構造を、すなわち先住民たちの貧困を再編しつつあるのか、ということである。これが、本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

以上のグアテマラの現代的動向を背景とし、次のような研究目的を設定した。

中米グアテマラにおいて被抑圧の歴史を強いられてきた、マヤ系先住民のとりわけ女性における家事労働に注目し、多民族主義が掲げられた現代グアテマラにおいて、彼女たちの多様な家事労働が市場経済に包摂される過程を考察することである。

かかる目的設定の社会的意義とは、グアテマラ先住民に関する議論に留まっていはいない。少子高齢化が深刻化する現代日本社会でも、日系ブラジル人や中国人研修生といった外国人が当たり前のよう働きながら暮らすようになった。そしてこうした人びとは、やはり国籍や文化といった属性によって、日本社会の底辺層で差別や被搾取といった困難を強いられている。

世界的規模で家事労働と市場生産労働の区別が流動的になるなか（ネグリ&ハート2001）、本研究は、多文化や多民族といった議論が圧倒的に蓄積されてきたグアテマラの議論を通じて、日本を含めグローバルな問題となった多民族や多文化に関する排除や搾取に関する議論に、重要な論点を投げかけることができると考える。

3. 研究の方法

先住民女性の家事労働が、市場経済へと、包摂と排除を揺らぎつつ「半周辺」の労働として商品化される過程を解明すべく、次の人びとを対象とした質的調査を行い、相違点、あるいは共通点を考察することで、先述の研究目的を達成する。

予定する聞き取り対象者は、山間部の伝統的な先住民村落から、現金収入のための選択肢が格段に多様な都市部へと移住してきた（あるいは出自の先住民村落が都市部近郊でも、先述のグアテマラ現代社会の動向のもとで都市部でのそうした現金収入のための選択肢を生き延びるために不可欠とされた）先住民女性が中心となる。

かかる就業機会を提供し得る都市部において、先住民が「真正」な生産者として特定の・限定的に動員される、マヤの伝統織物や民芸品の生産・販売・流通市場と、非先住民も先住民も、ともに区別なく押しなべて底辺労働者として競合関係のもとで搾取される、家政婦などの単純サービス労働市場の、それぞれにおいて、どのようなライフ・ヒストリーを経て先住民彼女らが動員・包摂されてきたのか。この過程を、聞き取り調査をもとにした質的調査によって考察した。

とりわけそのプロセスにおいて、「先住民である」という属性が、市場経済における棲み分けや競合の関係再編に果たす役割について、特に注意を払った。

また、得られたデータをもとに、申請者のこれまでのグアテマラでの共同研究ネットワークを利用して研究会を開き、多文化主義が掲げられる現状に呼応して「民族」という変数が、周辺経済での搾取構造の再編に果たす役割について、理論化する作業も研究の射程内とした。

ともあれこの理論化作業に関しては、グアテマラ・シティより遥かに規模が大きく社会的多様性に富んだメキシコ・シティでの事例とも相互参照させつつ、現在進行中である。

4. 研究成果

2. で記した本研究の目的に基づき、十数名への聞き取り調査を行った。その結果として、次の三名に特に注目することで、以下に述べる見解を引きだした。

Aさんは、自ら出自の山間部における先住民村落の村内および直ぐ近くに、十分な自給用のトウモロコシ畑を所有することができている先住民女性である。

Bさんは、グアテマラ北部キチエ県の極めて交通アクセスの難しい先住民村落の出身で、自宅のすぐ近郊にトウモロコシ畑を所有しているものの、それだけでは十分に暮らし

ていくことのできない先住民女性である。

Cさんは、同じくキチエ県北部の先住民村落の出身だが、幼少時に父親を亡くし、また、きわめて小規模の自給用トウモロコシ畑しか所有していなかった先住民女性である。よってCさんは、一〇歳頃に、コーヒーの大規模プランテーションが数多く展開されている南部の海岸平野地帯へと、山間部の出自村落を棄てて移住している。

さて、このような三名の先住民女性を例にとって、ライフ・ヒストリーに関して、詳細な聞き取り踏査を行った。三者の相違点から引きだされる見解を述べる前に、まずは共通した、前提となる重要な点を挙げておきたい。

この三名の先住民女性はいずれも現在、首都グアテマラ・シティから車で一時間ほどの距離にある地域に暮らしている。

また、彼女らへのライフ・ヒストリーに関してポイントになることとしては、自らの家族が、複数世代に渡って同じ敷地内に暮らし、セーフティネットとしての機能をいかにほどに果たしているかという点が挙げられる。

この点は極めて重要である。例えばメキシコ・シティを調査した小松が言うように（小松 2006: 62）グアテマラの底辺層の人びとも同様に、行政によって用意されるような社会福祉厚生サービスを利用する可能性はほぼ皆無である。そうした場合、かかる底辺層の人びとにとっての唯一かつ最大のセーフティネットとして、拡大家族が重要となる。つまり、同じ敷地内に高齢の父母、その子供たちの多くが暮らすことで、例えば誰かが事故や病気になった場合、あるいは家族に新たに子供ができた場合などには、誰かが学校を数年間休学する、誰かが一時的に南部大農園で（厳しい）現金労働に従事するなどして、拡大家族が直面した困難な状況を乗り越えられるようにするという点である。

（1）本研究での分析によって、AさんBさん、Cさんを比較した際、拡大家族として暮らしているがゆえのセーフティネットとしての機能が、いかにほどに利用できてきたかという点が、三者のケースでの現在における生活の安定性などに、極めて強く影響していることがわかった。

Aさんの場合、貧しい先住民村落の出身でありながら、最終的には首都の家政科の高等専門学校を卒業することができた。小学校、中学校を卒業し、かかる高等専門学校まで卒業したAさんは、その学的なキャリアを活かし、近郊の観光都市アンティグア・グアテマラ市において、星付きのレストランの厨房にて働いた経験を持つ。また、結婚・出産後には一時期、こうした経済市場からは離れることとなるが、子供たちが大きくなった後には、再び先の学歴を活かし、現在、出自村落の小学校の先生として、経済的に極めて安定した生活を送っている。

（2）Bさんの場合には、幼少時に貧困だったため、ほとんどキャリアとなる学歴はない。また、先述のように出自の山間部に十分な自給用のトウモロコシ畑を確保できなかったため、首都近郊のアンティグア・グアテマラ市へと出稼ぎに行かざるを得なくなった。キチエ県北部という遠隔からの出稼ぎのため移住先であるアンティグア市において、あらかじめ当てにできる就業のコネはほとんどなかった。そのため、彼女は一軒一軒高級住宅の家を訪ね歩き、家政婦としての働き口を見つけてきた。

注目すべきは、Bさんがこうしてアンティグア市にて、ある程度の土地勘や状況を把握して以降、妹や弟たちが相次いで同市へと出稼ぎにやってきたことである。拡大家族の根が、山間部からゆっくりとアンティグア市へと移動していったのだ。現在は、兄妹三世帯が同じ家で暮らすことによって、誰かの雇用が途切れたときや、誰かに子供が出来たときには、他の同居者の誰かが一度市場経済から撤退して家事手伝いとなることで、家族全体として生き延びることが困難になるということ回避して、現在に至っている。

（3）Cさんの場合は、幼少期の父親の他界、およびそれによる一家離散（南部プランテーションに働きに行く者、プランテーションで物乞いをする者等）により、一定地域に社会的生活を安定させることが、ほぼ不可能であった女性である。

彼女自身、出自の山間部村落での幼少期には「雑事請負 jornalero（僅かな賃金で何でも請け負う、最貧困層の職種）」をこなし、しかしこの職業では生活を維持することができず、南部大農園へ出稼ぎに行き（職業は物乞いやガムやタバコなどの売り子）、そして「より物乞いがうまく行く」と考え移住した、アンティグア市での観光客相手の物乞い（その後は同じくガムやナッツ、タバコを売り歩く最小資本での代表的な労働）などをやりくりしながら、どうにか生き延びている。現在は姉夫婦とともに暮らしているため、生活の安定度はある程度確保できるようになったが、先述のAさんやBさんに比べて、その安定度は格段に低い。

（4）以上をまとめると、第一に、グアテマラの現代社会において、「多文化主義」のもと、マヤ系先住民の育んできたマヤ文化は、一層のこと「目玉商品」として観光産業にて動員され、商品化されつつある。そして、彼女らは完全に市場経済に包摂されているというわけではなく、半周辺的な領域において、観光産業の浮き沈みに呼応しての労働力を柔軟に供給できるよう、「使い勝手の良い労働者」たる産業予備軍として措かれている。

だがこうした、極めて不安定な雇用状況のなか、彼女たちは、拡大家族をつねにベース

としながら、その「不安定さ」を乗り切るべく、自給的な生活(育った家に再び戻るなど)を維持しながら、上手く自給的な生活と、家政婦やホテル従業員などの(家事労働と同じ労働内容である)サービス労働者としての生活を、柔軟にスイッチしつつ、(拡大)家族として全員が生き延びることの出来るよう、状況に応じての選択肢を、多様に準備することによって、生き延びの戦略を保持していることがわかった。

<引用文献>

アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート、
<帝国>グローバル化の世界秩序とマルチ
チュードの可能性、水島一憲(他)訳、以文
社、2003

小松仁美、メキシコ合衆国首都 DF におけ
るストリート・チルドレン、ラテン・アメリ
カ論集(44)、2010、p. 62

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計3件)

中田英樹、「がんばろうニッポン」に暮ら
す日系ブラジル人と「フクシマ復興」
無償の善行としての「ボランティア」を切
り口に底辺賃金労働者の搾取を考える、
PRIME、第38号、特集「地球市民と平和」、
明治学院大学国際平和研究所、2015、pp.
25-35

中田英樹、戦後近代民主化における「三界
に家なし」農婦の「土着」する主体 岩手
県北の女性を綴った一条ふみの「その地に留
まるということ」、PRIME、第37号、明治学
院大学国際平和研究所、2014、pp. 77-100

中田英樹、「フェア・トレード」に乗ると
いうこと、農業と経済、シリーズ「世界の農
業/農村から」、2014年4月号、富民協会、
2014、pp. 100-101

[学会発表](計2件)

中田英樹、戦後引き揚げ者たちの生活と戦
後農政 岩手県山間部における開拓
農村の事例から、東北大学東北アジア研究セ
ンター創設20周年記念企画国際シンポジウ
ム、2015年12月6日、仙台国際センター、
セッションB2

中田英樹、グアテマラ先住民のコーヒーと
「農」、明治学院大学国際平和研究所主催国
際ワークショップ「農」における自律を考
える 働くことの脱商品化の道、2014年
3月9日、明治学院大学

[図書](計2件)

中田英樹、いったい誰のための先住民文化
か マヤ系先住民が維持してきたトウモ
ロコシの伝統文化をめぐる、木村真希子・
深山直子・丸山淳子(編)、先住民からみる
現代世界、昭和堂、2017(出版予定)

中田英樹、「コミュニティ」のはらむ問題
性 マヤ系先住民女性の家事労働の視点
から考える、秋津元輝・渡邊拓也編、せめぎ
合う親密と公共 中間圏というアリーナ
(変容する親密圏・公共圏)、京都大学学術
出版会、2017、pp. 55-83、(p. 326)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田 英樹 (NAKATA, Hideki)

成蹊大学アジア太平洋研究センター・客員研
究員

研究者番号：70551935

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()